

所報

No.124

平成30年2月26日

富山県総合教育センター

富山市高田525

E-mail:center@tym.ed.jp(代表)

URL:http://center.tym.ed.jp/

目次

- 巻頭言 1
- 各部研修の紹介 1
- 調査研究事業の概要 2・3
- センター事業より 3・4
- 随想 5
- 連載「知って得29」その3 6

巻頭言



為すことによって学ぶ

副所長 角間 匡之

数年前から時間があれば老いた父に代わり畑仕事をしている。土壌も日当たりも悪く、早くから耕作放棄された山あいの斜面を借り、遙かに望む雄大な薬師岳に励まされながら、タヌキや野鳥、様々な虫たちと格闘している。無謀にも無農薬で野菜を育てようと意気込んでみたが、専門誌やネットから得る知識だけでは、到底太刀打ちできない。栽培する30種類の野菜は、それぞれに掛ける手間もタイミングも異なる。一週間作業を怠けただけで、発芽した新芽が虫に食べ尽くされ、育てることの難しさを痛感させられる。

生徒指導の仕事を担当していた頃、「子どもたちは個性的で、抱える問題も生活環境も一人一人違う。野菜を育てるにも、その野菜に必要な手間を掛けないとうまく育たない。生徒指導は『野菜の心』が大切なんだ。」と先輩から教わったことが思い出される。ただ作業に追われるばかりで、野菜をよく見ていない自分に気付かされる。

「為すことによって学ぶ(Learning by Doing)」とは、ジョン・デューイの言葉である。教師であれば誰もが人

を育てることの大変さを体験している。そして、ただ体験を重ねているだけでは、教師力が向上しないこともよく分かっている。「体験し、その行為を反省的に思考することで初めて経験から学べる」というデューイの言葉の意味は、子どもたちだけでなく教師にも、畑での私にも当てはまる。

これほど教師の多忙感が話題になるのは、あまり記憶にない。それだけ社会変化のスピードが速く、教師に求められる資質や能力、仕事の質や量が変化している。しかし、どんなに忙しくても、教師が目の前の仕事に追われるだけの学校であってはならない。肝心の子どもたちにこそ目を向け、指導法や支援内容を振り返る時間がなければならない。教師が、為すことによって学べるように、個々の体験を組織の経験値にまで引き上げる工夫が必要である。

若手と中堅教員が話し合う研修、情報機器の効果的な活用、授業を振り返る有効な手法、チームとして子どもたちを支援するシステム等、総合教育センターには、学校現場を多方向から支える使命と機能がある。センターの真価が発揮される年になるよう願っている。

各部研修の紹介

教育研修部



新規採用教職員研修(幼稚園教諭)
講義と演習「記録と評価」
(11月30日)

科学情報部



高等学校理科実験実技研修会
「食塩結晶を用いたアボガドロ定数の測定」
(10月12日)

教育相談部



第3回適応指導教室担当者研修会
「適応指導教室通級生の事例検討会」
(1月19日)

- News -

第35回高等学校生徒海外派遣事業結団壮行式が行われました。

1月29日総合教育センターにおいて、第35回高等学校生徒海外派遣事業の結団壮行式が行われました。今回は「環境問題及びふるさと富山と国際交流」を研修テーマに、3月5日から12日間の予定で台湾、シンガポール、マレーシアを訪問します。県内高等学校、高等専門学校の団員生徒20人は9月から研修テーマについての学習や、現地学校との交流やホームステイ等に向けて研修を重ねてきました。が、出発を目前に心新たに決意を固めているようでした。



平成29年度 調査研究事業の概要



教育研修部

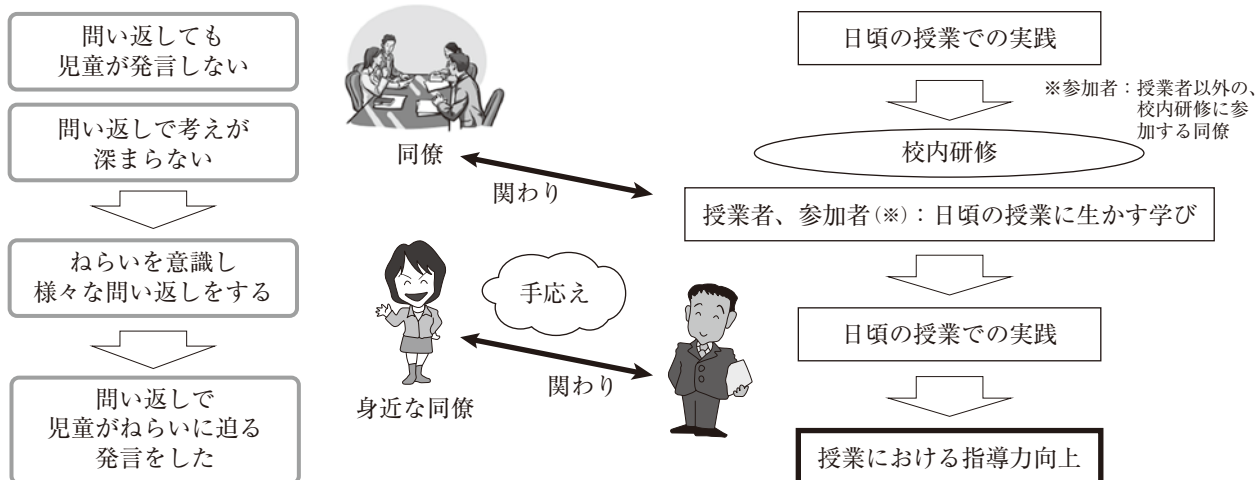
教員の授業における指導力向上に関する調査研究（2年次） — 校内研修の視点から —

教育研修部では、昨年度から2か年計画で、教員の指導力向上について、授業を対象に研究を進めました。昨年度は校内研修後の教員の意識面を中心に検証しましたが、今年度は、校内研修での学びが教員の日頃の授業にどのように生かされ指導力が向上するか、教員の実践面を中心に検証しました。

〈ある授業者の例〉

日頃の授業では、問い返しをしても考えが深まらず発言もしない児童がいると悩んでいました。校内研修では、模擬授業・公開授業・事後研修会を通して同僚からねらいを意識することや様々な問い返しを学びました。事後の日頃の授業では、ねらいを意識し児童の実態を踏まえた問い返しによって、児童がねらいに迫る発言をしました。これには、授業者だけでなく参観した身近な同僚も手応えを感じました。

〈ある授業者の例〉



科学情報部

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習の在り方に関する調査研究（2年次）—ICT活用による授業の支援—

近年、注目を集める2つのキーワード

アクティブ・ラーニング (AL)

富山県総合教育センターの調査では、ALの形態として、グループ学習を考えている先生方が多い。しかし、グループ学習に対しては効果的に進める上で、多くの課題を持つ先生が多い。



ICT活用

全国学力・学習状況調査の結果では、ICTを活用して協働学習や課題発見・解決型の学習指導を行った学校の方が、平均正答率が高い傾向が見られる。しかし、具体的にどのようにICTを活用しているかが見えてこない。



センター + 研究協力校(中学校)

グループ学習およびICT活用を取り入れ、主体的・対話的な深い学びを目指す授業を実践し
・グループ学習を取り入れた授業をする際のポイント
・ICT活用によるグループ学習のポイントとその対策を作成。

これらを先生方が
知ること

私も授業に取り
入れてみよう！

研究協力校のグループ学習およびICT活用を取り入れた授業実践事例（国語科、数学科、保健体育科、外国語科）をもとに、グループ学習のポイント、グループ学習の支援になるICT活用方法を具体的に紹介します。

児童生徒へのチームによる支援の在り方に関する調査研究 ー担任が指導に困難を感じている児童生徒への支援体制づくりー

児童生徒の複雑化・多様化する問題に対して、担任が個人で対応するには困難があります。教職員や専門スタッフ、関係機関が協働するチームによる支援が有効です。チームによる支援が機能するには、児童生徒の困難な状況を行動や心情から捉え、支援の方針や援助の方策を共有して対応するための情報共有や合意形成のための仕組みが必要だと考えます。

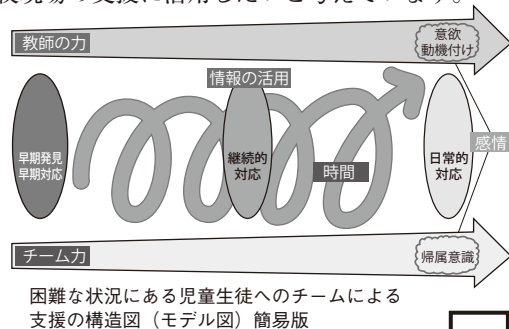
そこで、ケース会議を中心としたチームによる支援の仕組みを作成することで、学校ごとの特徴ある支援体制づくりが促進され、担任の困難を低減することを研究のねらいとしました。

研究1として、アンケートや聞き取りを用いて、チームによる支援の要素や課題を検討しました。研究2では、ケース会議の手順を示した「チーム支援シート」を作成し、研究協力校（2中学校区の小中学校それぞれ1校、計4校）の具体的な事例で活用し、教職員やチームによる支援体制に及ぼす影響について検証しました。

その結果、困難な状況にある児童生徒へのチームによる支援の要素を構造的に描いたモデル図を作成し、課題

を明らかにしました。また、児童生徒理解に基づいたチーム支援シートによるケース会議が、教職員の意識や行動、関係性に影響し、協働的・機能的なチームによる支援体制づくりが促進されることが分かりました。

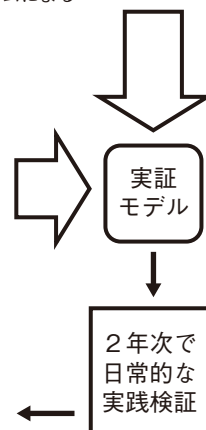
2年次には、これらを「実証モデル」として、年度当初からの比較的長い期間にわたって研究協力校で実践検証し、本センターが実施する学校支援訪問研修等を通じて学校現場の支援に活用したいと考えています。



チーム支援シートと内容	
①エピソードシート	担任が児童生徒の気になる様子を短いエピソードで書く。会議の資料。
②ケース会議進行表	エピソードを手がかりに、3つのステップと5つの手順で、問題の背景や行動の要因、困難な状況にある児童生徒の心情を捉え、支援の方針や方策、役割分担を決める会議の進行表。30分程度で実施できるよう工夫を加えた。
③リソースマップ	児童生徒自身ができていることやもっているもの（自助資源）や、つながっている人や関係機関のネットワーク等、援助資源（リリース）を一覧にしたシート。児童生徒を取り巻く地図のように見えることからマップと呼ぶ。
④ボードシート	ケース会議では、ホワイトボードに検討の様子を書き出し、ボードの画像で残す。ボードの構成に合わせた記録用シート。

表 チーム支援シート一覧

学校支援訪問研修会等を通じた学校現場の支援



センター事業

理科実験・観察訪問研修のまとめ

主管 科学情報部

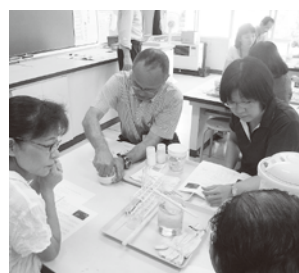
小学校の先生方を対象として実施してきた「理科実験・観察訪問研修」も、12月初旬で平成29年度の全日程を終えました。本年度は、24団体から延べ38テーマに申し込みがありました。「しんきろうの世界」、「試験管に雪を降らせよう」、「噴水遊び」等、実験や観察を通して「光」、「水」、「空気」の性質を調べるテーマに希望が集中したことが特徴としてあげられます。



しんきろうの世界



学校周辺の自然観察



試験管に雪を降らせよう



地層の観察

本年度は延べ651名の先生方が参加されました。参加されたとの先生方も積極的に研修に取り組み、「研修の内容を授業実践に取り入れ、児童と一緒に楽しく活動できた」という声も多く聞かれるようになりました。

今後とも要望の多い教材・実験器具の基本的な取扱いや、教科書と関連する観察・実験の研修項目を充実させ、参加の先生方と共に有意義な研修を進めることができるよう取り組んでいきたいと思っています。

外国語指導助手の指導力等向上研修会

主管 教育研修部

JETプログラム招致の外国語指導助手と各学校の日本人外国語担当教員が、一層効果的な語学指導ができるよう必要な知識・指導技術等を習得し、外国語教育に係る諸問題について研究協議を行うことで、外国語教育の充実を図ることを目的としています。

〔日 時〕平成29年11月15日(水)、16日(木) (2日間)
 〔講 師〕清泉女学院大学 教授 グレゴリー・バーチ 先生
 〔演 題〕15日「小・中学校のTTにおけるTEFL理論の応用」
 16日「高等学校のTTにおけるTEFL理論の応用」
 〔受講者〕JETプログラム招致外国語指導助手79名

(小・中学校35名、高等学校44名)

日本人外国語担当教員118名(中学校32名、高等学校86名)

◆研修内容の紹介◆

2日間にわたり、講演の他に 30 種類以上のワークショップを展開し、受講者が各自の課題・必要性・興味に応じてワークショップをあらかじめ選択し、参加できるようにしています。校種を超えての意見交換や、1年目のALTが先輩ALTから学ぶことができるOJTの形も取り入れています。今年は、授業外でもALTが力を発揮できる方法を模索するワークショップを多く取り入れました。

ワークショップ内容(例)

- ★生徒がよく間違える英語表現
- ★小学校におけるTT
- ★特別支援学校(学級)、英語学習に支援が必要な児童・生徒への対応
- ★理科の体験を生徒に伝える
- ★地域におけるALTの役割
- ★英語の掲示板作成とその活用
- ★ICTのさらなる活用
- ★中学校での効果的な英語キャンプ
- ★職場環境、人間関係づくり
- ★琴、浴衣着付、日本の鍋作り等の体験講座



TT授業の工夫についての話し合い



琴の演奏体験



理科体験(葉脈標本づくり)

問題を抱える子ども等の自立支援事業

主管 教育相談部

教育相談部では、文部科学省の「いじめ対策・不登校支援等推進事業(学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究)」を受け、市町教育センター・適応指導教室と連携をとりながら、不登校の子供の自立を支援する「問題を抱える子ども等の自立支援事業」を実施しています。運営協議会を年間2回開催し、調査研究内容の検討や本事業の成果であるよりよい取組事例を紹介し合うことで、不登校児童生徒への適切な支援が県内に広がっていくことを目的としています。

〈事業内容紹介〉

不登校児童生徒及びその家族への支援

体験交流活動(年4回)



家族キャンプ 8月



手作り工房 10月

人と関わる楽しさ、充実感、達成感を味わう

家族のためのセミナー(年2回)



専門家による講演

不登校児童生徒への理解と対応

訪問指導員による家庭訪問指導(6市町で実施)

・家庭に引きこもっている児童生徒対象



実態に応じた学習支援生活支援

適応指導教室への支援

訪問指導員による適応指導教室訪問(県内15教室)

児童生徒 個別相談・学習補助
 相談員 懇談・協議
 保護者 相談



援助・指導の充実

適応指導教室担当者研修会(年3回)

・情報交換
 ・事例検討
 ・講演



適応指導教室・学校・家庭との連携

かわら版「コスモス」(年2回発行)



事業や活動の情報交流

サポートチームの派遣

・適応指導教室等で行う学校復帰に向けた支援会議に、教育事務所の生活指導主事やセンターの客員研究主事等が参加

実効性のある方策の協議

随想1

学ぶ楽しさ

学力向上アドバイザー 吉江 友秋

以前から運動会や部活動の大会などで、生徒たちをカメラで撮影してきた。「やる気」みなぎる表情や頑張る様子が撮れた折には、学校祭や廊下に展示し、そこそこの写真が撮れた気になり自己満足に浸ってきた。その当時は、カメラの全自動（オート）撮影モードやシーン別のスポーツモード、人物モードの簡単撮影モードで撮っていた。

撮影対象であった生徒たちと接する機会がなくなり、今度は本格的な風景写真に挑戦したいと思い、2年前から月に一度、写真入門教室に通っている。

初めての講義で、「これからは、カメラ任せのオート撮影や簡単撮影モードでなく、絞りやシャッター速度、ISO 感度やホワイトバランスの組み合わせを自由自在に変えて撮影ができる応用撮影モードで撮影できるようになれば一人前ですよ」と先生から指導を受けた。つまり、これまでの機械（カメラ）任せの失敗しない撮り方から、失敗してもいいから自分の感性を磨き、カメラを自分の頭で使いこなさなさいということだった。

しかし、これがなかなか難しい。まずは、絞り、シャッター速度、ISO 感度などの基本的な用語の理解から始まった。半年ほどかけてようやく頭で理解できても、実際の撮影に活用できるかが問われることとなった。

毎月の宿題がある。10枚程度の写真データをUSBメモリで持参し、パソコンとプロジェクターで拡大し、先生から1枚ごとに批評をいただく。「ピントがきちんと合っていないぞ」、「やや露出オーバー」、「背

景が汚いな」、「主役、脇役がはっきりしない」、「シャッター速度の工夫を」などと、これでもかとばかりにマイナス評価をされると悲しくなってくる。一方、時折ではあるが、「これ、いいね」、「構図がいいぞ」、「きれいに撮れている」などとほめていただくと大変うれしい。そして、先生がパソコン写真ソフトを使い、風景の切り取り方（構図）や露出を少し変えただけで、自分の撮った写真が見違えるようによくなる。やはり口だけで教えていただくより、視覚に訴える具体的な指導が大変分かりやすい。

宿題に追われ、近場の撮影スポットに出かけ、家に帰ってからは写真の整理・編集作業とこれが結構忙しい。時間が経つのも忘れるほど夢中になっている自分に気付く。しかし、なかなか自分の思い通りの作品にならないというより、学べば学ぶほど、新たな失敗に気付いているのかもしれない。その失敗から学び、失敗を乗り越えて成長したいと願っている。入門教室も後1か月で2年間を終える。まだまだ上達しないカメラ小僧は、次年度も中級教室には進級せず、留年して入門教室3年目を継続しようかと考えている。失敗は成長のもと。実に、学ぶことが楽しい！



川倉不動滝（八尾）

随想2

気持ちを伝える

教育相談部長 戸島 宏之

ある日の夕方、職員室での話です。

電話で話していたA先生が、受話器を置きながら深いため息をつきました。B君の保護者から宿題についての質問があり説明したところ、うまく理解してもらえなかったようです。加えて、宿題以外のことについてもいろいろ質問されたとのことでした。

事情を聞いた学年主任の先生が「家庭訪問をして顔を見ながら丁寧に話をしてみたらどうですか」とアドバイスをしました。

文化庁は、昨年9月に平成28年度「国語に関する世論調査」の結果を公表しました。

結果によると、16歳から70歳以上まで全ての年代で9割以上の回答者が「コミュニケーション能力は重要だ」と答えています。

また、最も親しい人に自分の本音を伝えやすい手段として「直接会っての会話」と回答した人が9割と最多だったそうです。

さらに、「誤解やトラブルを招きやすい手段・方法」の質問では、「SNSやブログ」「携帯電話やパソコン等でのメール」の回答が特に多かったことも明らかになりました。

これらの調査から、多くの人がメールやSNSなどによるコミュニケーションは便利である反面、誤解を招く危険性があると認識していて、本音を伝える際には「直接会う」ことを望んでいる様子がうかがえます。

しばらくして、家庭訪問を終えたA先生が職員室に帰ってきました。

「説明したら、分かってもらえました。B君の頑張っていることも伝えることができてよかったです。わざわざ来てくださって…と、お礼まで言われました」と、にこやかに語りました。

A先生にいつもの笑顔が戻り、職員室も明るくなりました。

どんなに便利な社会になっても、相手の顔を見て気持ちや考えを伝えることがコミュニケーションの基本のようです。

A先生の家庭訪問から、そんなことを感じました。



理科室の
掲示板

プラスチックリサイクル

科学情報部 研究主事 岩城 圭一

ペットボトルの飲み口に疑問をもったことはありませんか？同じ商品なのに飲み口が白いものと透明なものがあります。白いものは、充填時や殺菌時に高温になっている中味を入れるときに容器密封性に大きく影響する口部が変形しないように、飲み口の部分に耐熱性を持たせるため、熱処理をしてあるので硬く結晶化し白くなっています。透明なものは「アセプティック（無菌）充填」用のボトルで、高温で殺菌した内容液をすぐ冷却し、無菌室で常温のまま無菌的に充填します。そのため飲み口の部分に耐熱性を持たせる必要がないので透明のままになっているのです。

さて、本体はポリエチレンテレフタレート(PET)ですが、蓋は2種類あり、白い飲み口のはポリプロピレン(PP:耐熱性に優れている)、透明なものはポリエチレン(PE:熱に弱い)を使用しています。これは本体と違う材料のほうが同じPETを使うより柔らかく、



よく閉まるからです。また、PETは水に沈むのですが、PE、PPとも密度が1以下なので水に浮き、分別しやすいという特徴をもっています。

私たちの身の回りでは、さまざまなプラスチックが利用されています。プラスチックは、加工しやすく、着色も自由自在で、価格も安く、さびたり腐ったりしません。しかし、安いということで安易に捨てられたり、「腐らない」という特徴が、その処分を困難にしたりするなど、新たな問題を引き起こしました。また、限りある資源を無駄にしまうことになり、資源の再利用は、持続可能な循環型社会を目指す重要な考え方となっています。その大本は石油などの有限な資源によるもので、プラスチックの廃棄物を再び資源として活用することができれば、資源確保、廃棄物処理の両面で貢献することができます。日本の廃プラスチックの有効利用率は、2016年では83%となっており、これは世界でもトップクラスに位置し、リサイクルへの取り組み意識の高さを示すものといえます。



マテリアルリサイクル
(再生利用)された
製品の一例

教育相談

連載

優しさと強さをもって

教育相談部 客員研究主事 舘野 智子

成人式で晴れ着姿の女性がインタビューに答えていました。「祖母のような、優しく強い女性になりたい」。かつて、「甲子園には、父親のような厳しさ、母親のような優しさがある。だから、生徒は憧れる」と言った高校野球の監督もいました。カウンセリングでも、優しさと強さ、母性と父性を意識することがよくあります。

カウンセリングで何より大切なことは、クライアントの考えや感情であり、ありのままの姿を尊重することです。ありのままを尊重することは、相手の可能性を引き出すことにつながっていきます。知識やスキルより相手との関係性です。例えば、不登校の子に「学校へ行かないでいいよ」と言うことがあります。常識にとらわれず、まず相手を受け入れれば、関係性を深めることは難しくなるからです。この時、心の中で「どうやって学校へ行くよう仕向けようか」と思っているとしたら、本当の受容とは言えません。悩んでいる子は勘が鋭いので、即座に見抜いてしまいます。

時には、強く出ることもあります。自宅にこもっている20代男性が、「俺がこうなったのは親のせいだ。一生働かないで復讐してやる」と声を荒げました。そ

んな人生観を受け入れられるのでしょうか。表向きは分かったような顔をしながら、「困ったなあ」と感じていました。自分を変えることに苦しんでいるとも想像しましたが、何度目かの家庭訪問で、ついに、「気持ちちは分かるけど、堂々巡りなら話していても意味がない」と告げました。すると、彼は「仕事を一緒に探してほしい」と言いました。関係性が保たれていれば、案外うまくいくものです。

クライアントとカウンセラーに限らず、子供は親に、児童生徒は教師に、優しさと強さを求めています。両方をバランスよく受け取りながら、人は成長し、人格を形成していくのです。一人の人の中には、母性と父性が存在しています。家庭や学校、社会も同じです。相手を無条件に受け入れてから厳しさを示す、この順番が大切だと思います。

